



着メ口



和乃 璃瑚

机の上で、ケータイが不機嫌そうな音をたてている。

仕事中ならともかく、家にいる時くらいマナーモードを切ればいいのに、私はそれをできないでいる。着メロが鳴った瞬間に彼ではないと分かるのが嫌なのだ。どっちみち彼じゃないことに変わりはないのに。

「ほら、やっぱり」

私は軽くため息をついて、友達からの電話に出た。

彼からの電話がなくなってから、もう3週間がたとうとしている。忘れもしない、あの雨の日から。

あの日。雨に濡れながら抱き合う彼と知らない女の人を見た日。驚いた目で彼が私を見た日。雨と涙でグチャグチャになって友達に泣きついた日。

バスタオルで私の髪を拭きながら、友達は言った。

「そんな奴、やめときな。忘れた方がいいよ」

そうなのかもしれない。その方がいいんだろう。でも私は、心のどこかで彼の言葉を待っていた。彼がきちんと説明して謝ってくれたら、私は許すつもりでいた。

なのにもう3週間。きっともう、無理なんだろう。そろそろ諦めどきかもしれない。

「もしもし、ゴメン！」

電話に出るなり謝られて、私は何が何だか分からなかった。どうして友達が私に謝るんだろう。

いぶかしげな私に、友達は申し訳なさそうに説明した。

あの女の方は、ただ彼に片想いをしていただけだということ。あの日から毎日、彼が私に手紙を書いていたということ。その手紙を預かっていたものの、彼を信用できなくて私に渡せずにいたこと。

「ほんとにゴメン。彼を信じるかどうかはアンタが決めることなのに。でも私、心配だったんだ。アンタがまた同じように苦しむことになったらって。だから……」

「分かった、分かったから。ありがとう、心配してくれて」

そうだ、私から電話をしよう。3週間分、話すことがたくさんある。聞きたいこともたくさんある。

私はまず、マナーモードを切った。

(完 結)

着メロ

<http://p.booklog.jp/book/43632>

著者 : nagomino-riko

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/nagomino-riko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43632>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43632>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.